

学生海外調査研究	
1960-70年代における韓国の五柳里の「家族計画オモニ会」活動に関するインタビュー調査	
李 知淵	人間発達科学専攻
期間	2012年8月6日～2012年8月20日
場所	韓国全羅北道任實郡聖壽面五柳里、ソウル
施設	五柳里のマウル会館、国立中央図書館

## 内容報告

### 1. 調査の背景と目的

本調査研究は、1960-70年代における韓国の五柳里という地域の「家族計画オモニ会」活動を通して、「家族計画事業」の実態と農村女性にどのような影響と結果をもたらしたかについて検討することが目的である。「家族計画」に関する議論を絞ると、以下のようである。

第1は、出生率の低下、避妊による産児調節、人工妊娠中絶の増加

第2は、近代家族を生み出す行動のあらわれ（荻野 2008、田間 2001・2006 など）

第3は、新生活運動、主婦をターゲットにした避妊と近代合理的生活の指導（荻野 2009）

第4は、女性のエンパワーメント、意図せざる帰結をもたらした（李 2011a）

以上のような観点から、調査ガイドとなる仮説化に向けて、「韓国における近代的な母親像の成立過程を性・家族・出産をめぐる慣習の変わり目の時期である1960-70年代における「家族計画事業」を草の根的に支えた女性たちの体験を通して近代的制度としての女性のありようが形成された」を設定した。なお、本調査では、女性のエンパワーメントと自立に焦点づけて韓国における近代的な女性像の成立過程の特徴を考えていきたい。

近代家族は、「国家などによる制度的な誘導が不可欠（山田 1994）」で、諸力のポリティクスの結果であった（田間 2006）。韓国は、朝鮮戦争（1950-53）後、国家経済を再建するため、女性の役割が重視されるようになり、その一環として行われた政府事業としては、「婦女教室」（1947）、「生活改善倶楽部」（1958）、「家族計画オモニ会」（1968）、「セマウル婦女会」（1973）がある。これらの事業を通して、政府は女性の精神啓発・資質向上、家庭福祉の向上、健全家庭の育成、ひいては地域社会発展を図った（韓国女性開発院 1985）。しかし、それぞれの女性組織は、同一の村単位で同一の女性たちを対象に構成された。それゆえ一人が複数の組織に加入し、兼職するケースも多数あった。さらに上級機関間の協議で運営されるのではなく、所属女性団体を通じて独立的に同一の内容を相互に指導・支援するなどの副効果が生じた。その結果、1977年には、「婦女指導協議会等に関する規定」により、既存の4つの組織が統合され、新たに「セマウル婦女会」として再組織された。そして統合された「セマウル婦女会」は、1977年末に組織数 60,352 グループ、2,423,663 人の会員が参加し、大幅な組織の整備がみられた。また同婦女会は、「意識啓蒙事業」「家族計画事業」「生活改善事業」「貯蓄事業」などの村単位の啓蒙指導事業を中心とし、20歳以上60歳未満の女性を対象に科学かつ合理的な教育事業を推進した（鄭慶均 1987）。このように、女性は国家の発展論理に統合される核心的な役割を果たした。

本研究では、「第1次経済開発5ヵ年計画」（1962-66）の一環として推進された「家族計画事業」の主要な担い手であった「家族計画オモニ会」（以下、オモニ会）を検討する。

オモニ会は、避妊用経口薬の普及のために1968年、全国9ヶ所の道内に16,868組のオモニ会を里・洞ごとに組織し、その会員数は194,617人に及んだ。家族計画要員とともに活動したオモニ会は、「家族計画事業」の実質的な遂行者の役割を果たすと同時に、生活改善や農家所得増大などの地域社会開発事業を行う地域婦女会の性格を持ち、全国規模の組織でありながらも農村を中心とした活発な組織活動を行った。それは、都市に比べて父系血統継承観念と男児選好思想が根強い農村部において、「家族計画事業」にいっそう力を入れる必要があったからである。オモニ会の特徴は、各町や村において「家族計画」に賛同する15人くらいの20-47歳の有配偶可妊女性たちが事業に自発的に参加し、会

長の選挙や事業の選択方式など、すべての決定を民主主義的な協議を通じて行ったところにある（家協 1991）。本会メンバーの教育程度は、小学校卒 64.4%、中卒 19.6%、高卒 4%、大卒 0.8%であった（朴亨鍾他 1974）。このように、「家族計画事業」の活動組織の推進に当たっては、オモニ会という女性団体が動員・組織され、女性たちの積極的な事業への参加や活動を促すこととともに、女性たちの意識の転換を図ったのである。

## 2. 調査研究の意義

本調査研究の意義は次のようである。

1960-70年代における「家族計画事業」を草の根的に支えた女性たちの活動の内実と意識を捉えることは、現代における韓国の女性と家族を理解する上で重要な手掛かりを与えてくれるものと思われる。しかし現状では、この点に焦点を当てた実証研究は管見の限り見当たらない。したがって、オモニ会メンバーの活動に焦点を当て、「家族計画事業」の展開過程と女性たちの生殖に対する態度の変化を追うことにより、女性たちはいかに政策に拘束され、同時に政策形成に影響を与えつつ近代家族を形成していくことになったのかを研究することは意義があると思われる。また、「近代的母親」規範を内面化する経路の解明より、現代に通ずる主婦役割、母役割が歴史的に構成されたものであることを再確認させることもできるだろう。そして現状では、1960-70年代の韓国という時代と国を限定したものであるが、今後は、日本の戦後における家族計画運動との比較も視野に入れながらさらに展開していく可能性を秘めている。

## 3. 調査対象と調査方法

### 3.1 本調査にいたる経緯

筆者は本学博士後期課程入学前から一貫して、1960-70年代における韓国の「家族計画事業」に関心をおいてきた。修士論文とD1（2010年）のときには、当時の雑誌記事を素材とするメディア分析を中心的な方法として研究を行い、その成果を『人間文化創成科学論叢』と『家族関係学』に掲載することができた。D2（2011年）のときからは、インタビュー調査を計画し実施した。歴史社会学の研究において、メディア分析と回顧法による語りデータの分析の両方を組み合わせることにより、両手法のデメリットを補いつつ複眼的な考察が可能になるからである。調査対象と研究方法については、2011年7月、韓国ソウル市永登浦区に所在する「大韓家族計画協会」（現、「人口保健福祉協会」）にメールと訪問をし、調査の趣旨を説明してインタビュー協力者の紹介を依頼した。筆者は、紹介していただいた方に本調査の趣旨を説明し、協力を依頼した。その結果、「家族計画要員」5人、「家族計画オモニ会」のメンバー4人の方から貴重な話を伺うことができた。調査時期は2011年8月と11月で、半構造化質問紙に基づくインタビュー調査を行った。このインタビュー記録をもとに論文を書き上げ、G-COE 成果論文集に掲載するようになった。今年度は、地域のオモニ会活動の実例を紹介し、分析していく予定である。具体的には「家族計画事業」のモデルとなった五柳里のオモニ会が事業を主体的に展開していくさまを描くとともに、事業の成功要因など、当時の韓国の農村の具体的な状況に注目して研究を行いたい。筆者は2012年5月に、現地の「マウル（村）会館」に訪れ、8月に実施する調査について協力いただけるという内諾を得た。8月に現地を再訪し、当時のオモニ会メンバーたちにインタビュー調査を行った。

### 3.2 調査概要

#### 3.2.1 手法

半構造化質問紙に基づくインタビュー調査。できるだけ調査対象者に自由に語ってもらうようにする。全員一対一で、時間は2～4時間である。なお、インタビュー内容は対象者の了解を得てICレコーダーで録音し、後日逐語的に情報を起こす。

#### 3.2.2 対象者

元オモニ会の会員、60-80代。

調査対象者の基本属性は、表1に示した通りである。

#### 3.2.3 調査内容

①基本属性、②「家族計画事業」への関わり、③オモニ会員として活動の実際、④1960-70年代の避妊、中絶、計画出産の状況、⑤現在から振り返ってのオモニ会員としての活動に対する評価など

#### 3.2.4 調査時期

2012年8月

#### 3.2.5 調査地域

韓国全羅北道任實郡聖壽面五柳里

### 3.2.6 地域選定理由

「家族計画」の実行状況は地域差が大きいと、具体的な様相を知るには、地域を限定した分析が求められるからである。また、五柳里のオモニ会の活動は『家庭の友』（1968-2005）という啓発誌で成功事例として紹介されており、かつては『五柳里の女性たち』というタイトルで1974年に映画化されて「家族計画事業」に用いられることにもなったからである。そして、五柳里を地域選定した主な理由は、主婦たちが主体的に運動を展開していくさまを描くことができると考えられるためである。

表1 調査対象者基本属性

順番	区分	年齢	学歴	居住地	家族構成	主要経歴
1	M1	73歳	高卒	全州市	息子3、娘1	里の家族計画オモニ会長（1971-73） →面の家族計画オモニ会長→セマウル 婦女会の中央会幹部→大統領表彰 →セマウル運動講師
2	M2	74歳	小学校卒	全州市 五柳里	夫、息子2、娘2	五柳里オモニ会長 （1968-71、1974-80）
3	M3	87歳	無学	五柳里	息子2、娘4	作業班長
4	M4	80歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
5	M5	87歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
6	M6	77歳	小学校卒	五柳里	夫、息子3、娘3	
7	M7	77歳	無学	五柳里	息子3、娘3	
8	M8	75歳	無学	五柳里	息子2、娘6	
9	M9	72歳	小学校卒	五柳里	夫、息子3、娘2	
10	M10	72歳	中学中退	五柳里	息子1、娘2	
11	M11	66歳	小学校卒	五柳里	夫、息子1、娘4	

### 3.3 五柳里とオモニ会

五柳里は、全羅北道の道庁所在地である全州市から車で約40分の距離に位置している典型的な農村地域である。世帯数は68世帯で224人の住民が生活しており、姜という名字を使う人が多い。朝鮮戦争の当時には、家門の一人が共産党に加入し、他の親族のほとんどが賦役をしなければならない立場であった。戦争後間もなく、当時の五柳里は監視対象地域に設定されたし、さらに農地がなく貧困に苦しんで村の状況はとても大変だった。こうした状況の中でも男性たちは、お酒と博打、喧嘩で惰眠をむさぼった。一方、賦役で苦勞を味わった住民たちは、みんなが集まったりして、ある組織を作るといふことさえ考えられなかった。それは、戦争中に経験した組織加入による副作用が多かったからである。そして、万が一やっていることを失敗してしまう場合、先導に立った人がすべての責任を負わなければならないことを見てきたからである。

五柳里のオモニ会は、1968年に大韓家族計画協会の傘下である全国オモニ会の組織事業方針にそって組織されたが、その組織体系については、家族計画の幹事からオモニ会組織を頼まれた里長が自分の妻を会長になってもらって、最初、10人の女性たちを集めて組織した。

## 4. 分析

### 4.1 農村社会における女性

#### ①挫折した学びの経験

学校に行けなかったんですよ。女は家庭教育が一番で教育なんかいらなくて。勉強させて嫁いで行ったら親に心配かけるっていわれました。（M2）

#### ②儒教的な慣習は男性の経済的な無力を正当化

当時、男たちは冬になると、3ヶ月以上を居酒屋でお酒を飲んで博打して遊んでいたんです。女たちはひたすら待つしかなかったんです。ご飯でも食べて遊んだらと思いました。あの時、女は旦那がご飯を食べないと出かけられなかったんですよ。（中略）息子たちに父親を連れてこいと行かせると喧嘩になるんです。口を出すなって、お前がどうしておれに対して行けとか来いとかいうのか。（M1）

### 4.2 家父長制的な家族規範の維持

#### ①旦那と姑の同意によるオモニ会活動

旦那が里長を担当したからです。当時は村で働ける人がいなかったんです。それで、はじめるよ

うになったんです。させる人もいないし、やる人もいないから。私は姑がいなかったんです。もちろん、姑から行っちゃいけないと言われてたら行かなかったんでしょう。(M2)

②女性の三重労働

大変だったもんね。だから洗濯みたいなものも夜に帰ってきてからやらなきゃ。人より何倍も働かないとね。(M4)

どこかに5泊6日教育に行くと、さっさと家事をやっというて行ったんです。家をあんなにしておいて教育なんていくのっていわれるのがいやだったから。(M2)

4.3 オモニ会の活動

①共同作業

私は作業班長だったんです。私が夜明け4時くらいにドラを打つと、村の女たちはみんな集まったりしました。夜明けに2時間ほど48人みんなが力を合わせて田植えをしました。(M3)

②栗の木団地の造成

栗の木を山に植えて何年くらい収穫したけど、働くのが想像以上だったの。とはいえ、私たちは(会長)が言うことをよく聞いたんです。させることは指示どおりに最後まで最善を尽くした。

私たちを救う神様を仕えるみたいに何でもやりました。(M5)

③金庫の形成

私は(セマウル)教育を受けて村で最初に取り組んだのが村の金庫づくりだったんです。個々人のお金があるとちょっと頑張ると思って、各自の通帳を作って個人名義のオモニ金庫を作ろうといいました。(M1)

④生活改善環境

何でも私が先導しました。台所、物置場、食器棚を改良するときも私が指輪を出したら、みんな涙を流しながら婚約指輪や結婚指輪を出してくれました。(M2)

4.4 国家とオモニ会の間の中継者

①政府の指導から近代化された知識の受容

学校に通う心で政府が実施する教育を受けたんですよ。教育に参加するときはまるで子どもが遠足にいく気持ちで行ったからね。毎日が楽しみだったんです。私は1回も居眠りしたり、雑談したりしたことがないの。(M2)

②セマウル教育は学びの回復

1972年6月になってセマウル運動が展開されたんです。セマウル運動は全国で行われて韓国全体が大騒ぎになったし、官では教育を受けに来てくださいと知らせました。聞いた授業の内容は私の心を動かしたし、特に有名な講師たちの講義は理解のないところがいっぱいあって何でもノートに書き込んだんです。(M1)

5. 結語

韓国の1960年代から1970年代にかけての時期は、女性政策的動向からみると戦争被害女性を対象とした応急救護及び援護事業から指導啓蒙及び健全家庭育成を目標とした新生活運動への転換点に位置する。女性啓蒙教育活動においては、「女性の教養を高め、男性に属している隷属的地位から抜け出し、真の民主社会の一員として完全に均等な機会を得るようにする」(保健社会部1987:68)という目標の下で、農村女性を中心とした啓蒙事業が展開された。特に、政府は保健社会部(現、保健福祉部)の管轄に「婦女教室」(1967)と「家族計画オモニ会」(1968)を設立し、女性の地位及び資質向上などを図った。こうした政府の動きによって、農村女性の地位や暮らしは朝鮮戦争以前より向上したとはいええないものの、この時期は、次第に女性の社会参加が増えることより、女性相互間の交流と親睦の場が形成されつつある時期であった。

以下では、本調査の分析結果を要約する。

第1に、分析4.1と4.2から分かるように、当時、農村女性たちには家庭教育を重視し、男性の非経済活動は男尊女卑の封建的意識の中で容認された。また、女性に重くかかっている家事や育児などがあったとはいえ、学びに対する女性の強い意志がうかがえるとともに、封建的家父長制度下で女性たちは過重な労働を絶えるしかなかったことが読み取れる。

第2に、分析4.3が示すように、オモニ会メンバーたちは共同体意識が強く、相互協力して難題を乗り越えようとした。また、M5の発言からうかがい知れるように、オモニ会のリーダーに対して一般女性たちは強い信頼感を持っており、それは新しい村づくりにつながると信じていたからと考えられる。そして、オモニ会の活動は、女性個人の通帳作りを通じて女性の経済的な自立を促すきっかけとなった。

第3に、分析4.4から分かるように、本会メンバーの教育程度は、無学、小学校卒が多かったが、

教育活動に対する女性たちの熱意と情熱は溢れていたことがみられる。政府で行われたセマウル教育に参加した女性たちは学びに対する熱望を主体的な実践を通じて得ようとしたことが読み取れる。

最後に、オモニ会員の活動、そして当時の「家族計画事業」の影響について、述べておきたい。

韓国社会の近代的産業化過程において、道具的家族主義と其中的女性たちが遂行した性役割労働は、徹底に国家主導発展プロジェクトに動員されたと指摘され、無制限に使うことができる「自然資源」(黄正미 1999)や「補償を叶わぬ献身」(金현미 2000)とみなされている。彼女らの指摘に従えば、女性は国家の発展論理に統合される核心的な役割を果たしてきたが、この際、女性は徹底に私的なものとして扱われ、国家発展のための道具として位置づけられたといえよう。しかし反面、事業に携わった女性たちはそのことによってエンパワーされるとともに、結果としてもたらされた家計状態の改善や子どもに対する心性の変化は、その後の韓国の歴史における近代的な家族形成の契機を与えた(李 2011a・b)。すなわち、オモニ会は、国の考案のもとで活動を始めたが、家庭及び社会生活での差別を克服することができるよう、自ら力づける社会教育を行う活動であり、国家の女性に対する政策的アプローチは、女性の社会地位を改善し、その役割を変化させ、女性のエンパワーメント教育を実現させる結果をもたらしたのである。

### 【謝辞】

今回の「女性リーダーを創設する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムで得られた成果は、第22回日本家族社会学会大会(2012年9月16-17日、お茶の水女子大学)で発表した。現在執筆中の博士論文は1960-70年代における韓国の「家族計画事業」と女性をテーマとしているが、今回の調査結果を分析し、論文に反映させたいと考えている。インタビュー調査にあたって、御協力いただいた皆様に、この場をお借りして暑く御礼申し上げます。

### 参考文献

- 田間泰子(2006)『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社。  
田間泰子(2001)『母性愛という制度』勁草書房。  
山田昌弘(1994)『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス—』新曜社。  
荻野美穂(2008)『「家族計画」への道—近代日本の生殖をめぐる政治—』岩波書店。  
荻野美穂(2009)「どのようにして子どもは『つくる』ものになったのか(特殊:歴史の中の「少子化」)」『比較家族史研究』24, 9-20。  
李知淵(2011a)「韓国の『家庭の友』からみる「家族計画」—女性の主体性の観点から—」『人間文化創成科学論叢』13, 169-177。  
李知淵(2011b)「韓国における「家族計画事業」と近代家族の成立—1960-70年代における「家族計画オモニ会」を中心に—」『家族関係学』30, 167-178。  
大韓家族計画協會(1991)『家協30年史』。  
朴亨鍾他(1974)『어머니會研究』益文社。  
鄭慶均(1987)『家族計劃어머니會研究』大韓家族計劃協會。  
韓国女性開発院(1985)『女性白書』。  
保健社会部編(1987)『婦女行政四十年史』。  
黄正미(1999)「發展國家와 母性—1960-70年代 婦女政策을 中心으로—」심영희, 정진성, 윤정로(共編)『母性の談論과 現實』나남。  
金현미(2000)「韓國의 近代성과 女性の 労働權」『韓國女性學』韓國女性學會編, 16(1)。

い じよん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

### 指導教員によるコメント

李さんの研究関心は一貫して、1960-70年代韓国における「家族計画事業」におかれている。戦後なお深刻な貧困と食糧問題に悩む韓国政府は、この時期に家族計画事業を推進するが、その主要な担い手は、家族計画オモニ会のメンバー、家族計画要員という地域の一般女性たちであった。彼女たちの国家の要請に従った活動は、一方で女性から性と生の自由を奪い、しかしもう一方で、彼女たちの家族役割の負担を軽減し、地域活動経験からエンパワーされるという二面性をもつものであった。当時の家族計画事業を草の根的に支えた女性たちの活動の内実と意識を捉えることは、現代における韓国の女性と家族を理解する上で重要な手掛かりを与えてくれるものと思われる。

しかし現状では、この点に焦点を当てた実証研究はほとんどない。このため李さんは、昨年度より

当時を知る生き証人ともいえる女性たち（元家族計画オモニ会メンバー、元家族計画要員）へのインタビュー調査に着手し、今回の海外調査によりさらに多くの女性たちの声を聴き取ることができた。博士論文の構想もほぼ固まり、今後はこれらの語りデータを活かしつつ、博士論文の完成に向けて着実に成果を上げてくれるものと期待している。

（お茶の水女子大学人間文化創生科学研究科（人間科学系）・藤崎 宏子）